

かみのやま歴史・文化財さんぽ

第5号（平成30年1月）

ミドリ「お湯が溜まっている所があるね。」
ふみお「“足湯”と書いてある看板があるよ。」

文じい「足湯は名前のとおり、足だけ入れる温泉で、この町には5ヶ所あるようじゃ。」

ふみお「ここは湯町だよね。」

文じい「そう。かみのやま温泉の湯元、つまり初めて温泉が出たところで、それがわかるかみのやま温泉の源泉や薬師堂がそばにある。昔はもっとにぎやかであった。」



あゆむ「大事なものは、ここを登るとあるの？」

ミドリ「“保存樹林”という看板が立っているわ。」

あゆむ「ケヤキ、モウソウチク、アカマツだって。」

あゆむ「小型の石の神社のようなものがある。」

ふみお「石祠だね。」

あゆむ「あ、見えてきた。なんか広場のようになっているね。ブランコのあとじゃない？」

ミドリ「“元山王社”とも言ったわよね。いったいここはどういうところ？」

文じい「昔、土岐頼行という殿様が、生まれた長男のために山王神社を建てたが、その跡じゃ。ブランコのようなものは、子どもたちの遊び場の名残りじゃ。」

あゆむ「ここに石が2つ立っているけど、大事なものって、どっち？」

しょうちゅう に ねんだいにちいた び

正中二年大日板碑

ゆまち もとさんのうしやち
(湯町 元山王社地)

ふみお「右は、“湯殿山”。左は、よく見えない。」

文じい「うむ、どちらも大事じゃが、左のものが貴重なものじゃ。右の方は江戸時代のもので、わきに文政五年と彫ってあるから、1822年になるの。」

ミドリ「でも、左の方はよくわからないわ。文じいにはわかるの？」

文じい「うむ。実はわしにも全部はわからない。ただ、真ん中の上にはなにやら記号のようなものが大きく見える。」

ふみお「なんだろう？」

文じい「“アーク”と呼ぶ字じゃ。」

あゆむ「何？それ。」

文じい「“種子”というものじゃ。普通“しゆし”とも読むがの。」

ミドリ「植物の種のこと？」



文じい「ま、そうじゃな。種が命の元ということから、すべての力や幸せの元というような意味で名付けられた言葉じゃな。この字は“梵字”といい、古代インドの“サンスクリット語”を表す文字じゃ。これ一字で仏様を表す。」

あゆむ「この字一つで仏様を？」

ふみお「“アーク”は、何の仏様？」

文じい「“胎蔵界大日如来”じゃ。」

ミドリ「“お大日様”というのかしら。」

文じい「そう、その通り！」

あゆむ「あと、ほかの字は？」

文じい「くわしく研究している加藤和徳先生に教えてもらったのじゃが、図のように彫ってあるというんじゃ。」



あゆむ「よくわかるね。」

ミドリ「ところで、意味はどういうことなの？」

文じい「これは、右、志者、過（過去）の為、あの世の愛する父母の霊を弔います。正仲二年は正中2年（1325年）のこと。乙はおつ、丑はうし。これは、干支で、正中二年を表す。孝子は、子である自分。敬白は、敬って申し上げますということかな。」

あゆむ「お父さん、お母さんをおがんだんだ。」

文じい「その後、これを建てたんじゃな。」

ミドリ「今は、こういうことはしないの。」

文じい「前に、法事をしたことがあったじゃろう。あれが同じようなことじゃ。」

あゆむ「でも、石はたてなかったよ。」

文じい「お墓の後ろに細長い板を立てたじゃろう。あれがそうじゃ。“とぼ”と言っておるが、いわゆる“卒塔婆”というものじゃ。」

ふみお「じゃあ、これは石の卒塔婆なんだ。」

文じい「そう。こういうものは、石の板でできている碑だから、“板碑”と称しておるが、加藤先生は、“自然石卒塔婆”と称しておる。」

ミドリ「ふうん。それにしても、ずいぶん昔だね。計算すると692年前だわ。」

ふみお「鎌倉時代あたり？」

文じい「その通りじゃ。よくわかったな。このように古いものでわずかしかないものはとも貴重になる。」

あゆむ「ふうん。でも、上の方がわれているよ。」

文じい「うむ、これはなんでも小川の橋に使用されていたらしく、それでわれたものやら、橋をかけかえようとした時梵字が見えて、元のここに移されたと聞いておる。」

ミドリ「そんなことがあったなんて聞くと、やっぱりみんなで大事にしていかなければならないわね。」

ふみお「そうだね。それにもっと他のものも見てみたくなかったな。」

文じい「よし。では、つぎは山元に行ってみよう。」

